

「喜乃と会う時は驚いた。まさか、カフェーにおるとはのう。喜乃という娘、一、二度顔を見た程度だったが、酔客の相手のできる娘ではないと思うとつたから…。」

信次は話を続けた。

喜乃が、カフェー勤めをするようになったのは、さし迫って必要な、弟、文平の学資のためであった。

金策に困り果てたあげく、修造は、文平に事実をありのままに話したのである。

「父ちゃんの力では、もうどうすることもできない。文平、こらえてくれ。」

息子の前に頭を下げる父親に、文平は、

「おれ、自分でできる仕事をやってみる。それでいるだけの金を蓄えて、それから中学校の試験を受ける。一年や二年遅れてもかまわん。やるだけはやってみるから…。」

父ちゃん、心配するな。」

と逆に父親を励ました。

母親を早くに亡くし、父子三人で細々と田畑を作って暮らしてきた一家にとって、文平の秀才ぶりは唯一の誇りであった。

喜乃は何とかがして、弟に中学の門をくぐらせてやりたかった。

金釦を胸に光らせた文平の中学生姿を

想像してみるだけで、喜乃は胸がいっぱいになった。

修造とても同じに違いなかった。

喜乃は小学校時代の同級生、さよに相談した。さよは、自分の勤めているカフェー、リーベの女給になることをすすめた。

しかし、それが、酔客相手の仕事であることに、喜乃は二の足を踏んだ。だが、

「お金にはなるよ。がんばれば、一か月五十円ぐらいいはなるから…。」

と言ったさよのひと言が、喜乃を大きく動かした。(五十円あれば、文平に学問をさせてやれる)

ほかのことは、何も考えないことにした。

喜乃は高松の片原町にあるカフェー、リーベの

女給になった。

リーベでは働き頭であるさよが口を利いてくれたおかげで、十円の前借りができた。

差し出された十円に驚き、無断でとつた喜乃の思い切った行動に、修造と文平は言葉を失った。

「貧乏とはつらいもんよのう…。」

吐息と共に、修造は呻いた。

文平は、夜つびで泣いていた。

声を忍んではいても、喜乃には、弟の泣き声が一晚中、胸にしみ入るように聞こえていた。

春。文平は中学の入学試験に合格した。

夢にまで見た文平の中学生姿が、現実に目

の前まえにある。修造しゅうぞうも喜乃きのも、それまでの思い思いおもの苦勞くろうを忘れたわす。

文平ぶんぺいは中学校ちゅうがっこうの寄宿舎きしゆくしゃにはいり、喜乃きのもさよといっしょにリーベちかの近くで部屋へやを借りた。

飯内村いらいちむらから店みせまで、女おんなの足あしでとても通える距離きよりではなかったし、目引き袖引きめひそでひ噂うわさの種たねにするに違ちがいない村人むらびとたちの視線しせんから逃れるための方策ほうさくでもあった。

たった一人ひとりきりになった修造しゅうぞうは、終日しゅうじつ、黙々もくもくと田畑たはたの仕事しごとを続けた。

そこまで語かたった信次しんじは、言葉ことばを切きって膝ひざを崩くずした。着物の袂たもとから煙草たばこを取り出だして、火ひをつけた。

ていた。

修造しゅうぞうがきた時とき、わしが金かねを出ださなんだことが、こうなったことことの起おこりじや、と思おもうとつたらしい…。」

信次しんじは、半分はんぶんしか吸すっていない煙草たばこを灰皿はいざらの中なかでもみ消けした。

言葉ことばがとぎれた。いつまで待まっても、次つぎの言葉ことばが出てこなかった。

露ふきは、顔かおをあげた。

信次しんじの結むすんだ唇くちびるの端はしがかすかに震ふるえていた。閉とじた瞼まぶたの間あいだから、じわじわと滲にじみ出てくるものを見た時とき、露ふきは胸むねをつかれた。

(この人ひとは、真底しんてい、喜乃きのに恋こいをしている…)

露ふきは動うごかなかった。膝ひざに眼めを落おしたまま、微動びどうだにしなかった。

「カフェのな。隅すみの方に坐すわった無口むくちな娘むすめが、喜乃きのだったちゆうわけじや。

喜乃きのも驚おどろいとつた。まさか、わしがやってくるとは、思おもわなかったじやろうけん…。」

客きやくあしらいにも慣なれず、言葉ことばも少すくなく、一人忘ひとりわすれられたように坐すわっている年若としわかい女給じよきゆうに、

信次しんじが、男おとことして、それもゆかりのある男おとことして捨すてては置おけない思おもいを抱だいたであろうことは、露ふきにもおぼろげながら察さつしがついた。

「喜乃きのは最初さいしよ、わしを避さけた。わしは追おいかけた。喜乃きのがわしを見る眼めには、いつも恨うらみがこめられ

確信かくしんが持もてた。

喜乃きのの話はなしをしながら、信次しんじは、溢あふれてくる自分じぶん自身の感情かんじようをもてあまして絶句ぜつくし、驚おどろくことことに涙なみだぐんでさえいるのだ。

露ふきの胸むねに火ひがついた。その火ひは、徐々じよじよに炎ほのおの色いろを濃こくして行いった。嫉妬しよとのほむらの熱あつさに、露ふきはじっとしていられなかった。

「もう、ええ。もうええですから…。」
立ち上たがろうとした。

「待まってくれ。もう少しだけ聞いてくれ。」
信次しんじの声こゑには絶叫ぜつきようのような響ひびきがあった。

「わしはな。喜乃きのの子こが生まれたら、この家いえへ引きとりたい。それをお前まえに承知しょうちしてもらいたい

じや。子供は……わしの子じや。長山家の子じや
。。。」

信次は、ひと息に言い切った。

露の中で時間がとまった。

立ち上がろうとしていた膝が、がくと落ちた。

そうだったのだ。生まれてくる子が信次の子だ

としたら、それは長山家の子ということになる…。

時間のとまった露の脳裏に、洪水のような勢

いでなだれこんでくる、ある想念があった。

(子供…。そうや。子供だったんや)

露は、この日頃、なりをひそめていた一つの影

法師が、再び大きく立ち上がって、今、信次と

自分との間へ割りこんできたのを感じた。

子供の形をしたその影法師が、露には、おどろ

おどろとしたものの怪のように思えた。

わが子を持つことへの執念の燠火を、信次は

ずっと消さずにいたのだ。

このところ日々のおだやかさに、安閑と浸って

いた自分の甘さが、今さらのように情なく思え

た。

そして、おりおりに分の中をよぎったあの方

す黒い影は、このことへの潜在的な予感だったの

だと気づくのがだった。

その夜、露は輾転反側した。

信次が一晚中、寝息を立てなかつたことも知

っていた。信次も眠っていなかつたのだ。

ガラス戸越しに霜のおりる気配が感じられる

ような夜であった。寝返りを打つと、布団の触れ

合う音が、さきやくように闇の中に聞こえた。

露は、あの、風の日に出会った修造を思い出し

た。あの頃、修造は、露と出会わぬように自分か

らずっと避けていたのではあるまいか。

露の視線を絶えず逸らしながら、うろたえたよ

うな眼をどこへともなく泳がせていたあの日の

修造。あれは、信次と喜乃の間柄にかかわって

いた修造の、とまどいだったのか。困惑だったの

か。いやいや、何も知らぬ露への憐憫だったかも

知れない。同情だったかも知れない。

子供の形をしたその影法師が、露には、おどろ

おどろとしたものの怪のように思えた。

わが子を持つことへの執念の燠火を、信次は

ずっと消さずにいたのだ。

このところ日々のおだやかさに、安閑と浸って

いた自分の甘さが、今さらのように情なく思え

た。

そして、おりおりに分の中をよぎったあの方

す黒い影は、このことへの潜在的な予感だったの

だと気づくのがだった。

その夜、露は輾転反側した。

信次が一晚中、寝息を立てなかつたことも知

自嘲の思いが、露の胸を満たした。

修造が年賀に顔を出さなかつたわけを、信次

はすでに知っていたのだ。それを単純にふしぎ

に思い、夫に迷惑をただしてみようとさえして

いた露であった…。

自ら嘲笑する声が、露の胸の中に、ひびき

渡った。

数限りない想念が脈絡なく乱れ交い、絶えず

脳髓に痛みを走らせた。

「あんた……。信次さん…。」

露は信次に呼びかけた。

「……」

返事のかわりに信次は、黙って起き上がった。

布団の上に掛けてあった絆天を羽織ると、あぐらをかいた。

露も身体を起こした。

「わたしを、喜乃さんと会わせてください。」

まるで話の続きでもあるかのように、露は

いきなり口を開いた。

「一度、会って話をせんと、納得ができません。」

ややあつて、信次は口を開いた。

「喜乃は……今、女木島におる。わしが仕事の

関係で知り会った男が、女木で漁師をしとる。そ

こへ……身二つになるまで預かってもらうこと

にしとる。こつちでは、人目がうるさいから……。」

聞きとりかねる声であった。

が、次の瞬間、

「お前に子さえ生まれとつたら、こんなことには

ならなんだぞ。わしばかりを責めんでくれ……。」

幼子が泣きわめくに似た声を上げて、信次は

布団の上へごろりところがった。はずみで枕が

とんだ。

露は、目を見はつた。三十七歳の分別ざかり

の男の姿とは思えなかった。

何かに行き詰まると力をもつて押さえつけよ

うとする信次の性格がむき出しに現われていた。

露は言葉もなく、ただ信次を眺めているばかり

であった。

(以上3月10日放送分)